

推薦レポート

坂本清恵先生推薦

定家本『土佐日記』「ここやいつこ」場所を表す指示代名詞の考察 ―時代・文体・共起表現に着目して―

藤 原 亜 梨 紗

◇ 目的と方法

本レポートは、定家本『土佐日記』（担当範囲…見開き二九ページ目）内の「ここやいつこ」という表現について、ほかの場所を表す指示代名詞と比較し、時代・文体・共起条件の観点から使いわけの傾向を明らかにするものである。国立国語研究所「日本語歴史コーパス」を利用し、調査を行った。担当範囲の翻刻を次に示す。

◇ 翻刻

定家本 『土佐日記』（一月二九日条の一部）

とそいへるうみにてねのひのうた
にてはいかゝあらん又ある人の
よめるうた

けふなれとわかなもつますかすかの、
わかこきわたるうらになければ
かくいひつゝこきゆくおもしろき

ところに舟をよせてこゝやいつこ

と、ひければとさのとまりとい
ひけりむかしとさといひける
ところにすみける女この舟に
ましれりけりそかいひけらく
むかし、はしありし所のなくひ
にそあなるあはれといひてよ
めるうた

年ころをすみし所のなにしおへは
きよる浪をもあはれとそみる
とそいへる

卅日あめ風ふかすかいそくはよる

◇ 場所を表す指示代名詞

調査にあたって、今回考察する場所を表す指示代名詞の辞書における意味を記す。①から④の漢字表記は「何処」、⑤は「彼処」である。派生形には諸説あるが、語意はジャンナレッジ『日本国語大辞典』を参照している。

- ① イヅク・「く」は場所を表す接尾語）不定称。場所を表す。「いづこ」の古形だが、平安時代以後も併用された。どこ。
- ② イヅコ・「いづく」の変化した語）不定称。場所を表す。平安時代から用いられた。どこ。
- ③ イドコ・「いづこ」の変化したもの）不定称。「どこ」の古形。
- ④ ドコ・「いづこ」から転じた「いどこ」がさらに変化した語）不定称。場所を表す。どこのところ。
- ⑤ カシコ・他称。話し手、聞き手の両者から離れた場所を指し示す（遠称）。あそこ。

◇ 定家本・青谿書屋本「ここやいつこ」と宗綱本・実隆本「ここやいとこ」

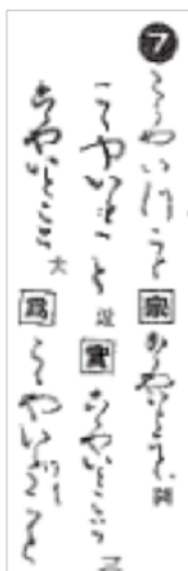


図1：池田亀鑑「古典の批判的処置に関する研究 第三部」 pp.55

池田亀鑑氏「古典の批判的処置に関する研究」を参照したところ、翻刻七行目終わりに異同があった。宗綱本と実隆本の本文「ここやいとこ」が、青谿書屋本と定家本では「ここやい川こ」となっている。

◇ 「土佐日記」諸本の成立時期

成立年代を考慮して指示代名詞の使いわけを検討するため、諸本の成立時期を示す。

青谿書屋本・（原本の本文を受け継ぐため）平安期（とみなす）
定家本・鎌倉期 宗綱本・実隆本・室町期

1. 仮名形出現形の推移

まず、「何処」の読み方について時代ごとに特徴を捉えるため、「日本語歴史コーパス」で語彙素「何処」の仮名形出現形を調査した（表1）。ただし、ここでは四つ仮名を問題としないため、イズクはイズク、イズコはイズコに統一している。ほかに、仮名遣いにゆれのあったドツやドツコ、ドケエはそれぞれ、ドッ、ドッコ、ドケへとした。

表1からは「何処」の読み方の推移をたどることができる。上代はもっぱら「イズク」を用い、『土佐日記』が成立したとされる平安期には「イズク」と「イズコ」を併用し、定家が生きた鎌倉時代は「イズク」が優勢だといえる。

同様の集計結果を時代別にまとめた（表2―5）。表4・5より、宗綱書写本や実隆書写本が成立した室町時代は「ドコ」の用例が増え、「イズク」が再び多くなっていることがわかる。江戸期には「何処」の読み方の種類がさらに拡大したようだ。

また表2・3から、平安時代はイズコ・イズクの順に、そして鎌倉時代はイドコが現れイズク・イドコの順に出現頻度が多いことが読みとれる。二表より、定家は『土佐日記』が成立した平安時代に「イズコ」が一般的であったことをふまえ、鎌倉時代に優勢な「イドコ」ではなく、「イ

「ヅコ」とした可能性がある。

同様の集計結果を時代別にまとめた（表2—5）。表4・5より、宗
綱書写本や実隆書写本が成立した室町時代は「ドコ」の用例が増え、「イ
ヅク」が再び多くなっていることがわかる。江戸期には「何処」の読み
方の種類がさらに拡大したようだ。

時代はイドコが現れイヅク・イドコの順に出現頻度が多いことが読みと
れる。二表より、定家は『土佐日記』が成立した平安時代に「イヅコ」
が一般的であったことをふまえ、鎌倉時代に優勢な「イドコ」ではなく、
「イヅコ」とした可能性がある。

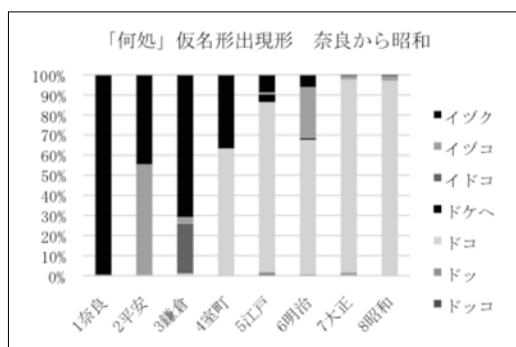


表1：語彙素「何処」仮名形出現形 変遷

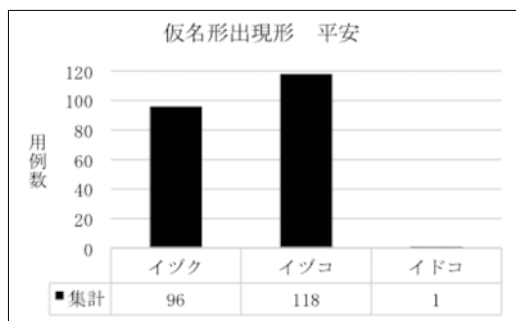


表2：語彙素「何処」仮名形出現形 平安時代
※イドコ1例は担当箇所仮名形出現形

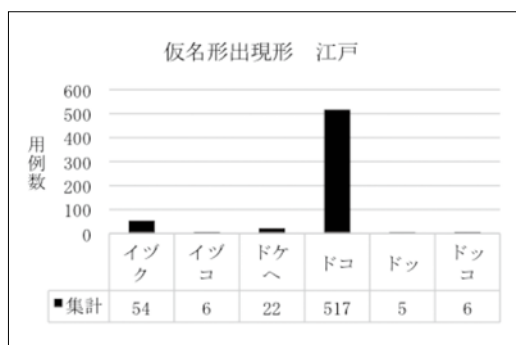


表5：語彙素「何処」仮名形出現形 江戸時代

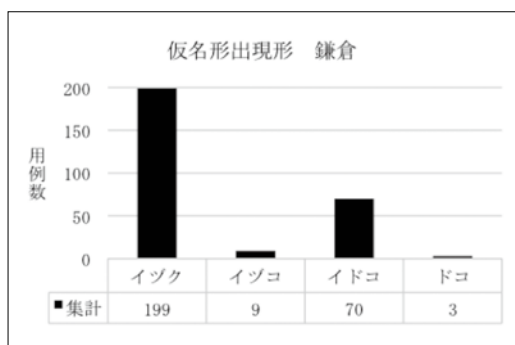


表3：語彙素「何処」仮名形出現形 鎌倉時代

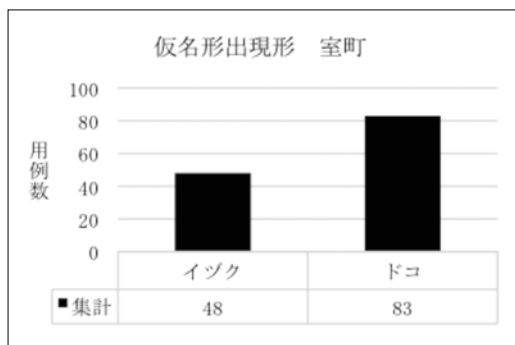


表4：語彙素「何処」仮名形出現形 室町時代

2. 資料形態の特徴

次にイヅク・イヅコ・イドコ・ドコが、それぞれどのような文体で選択される特徴があるかを検討する。作品のジャンルごとに用例数を確かめた(表6―9)。

その結果、「イドコ」は担当箇所を除くと、鎌倉期に和漢混交文で書かれた『今昔物語集』にのみ用例があるとわかった。一方、イヅク・イヅコ・ドコは和文・漢文・和漢混交文型といった資料の文体を問わず、様々なジャンルの作品にみられることがわかった。

ところで、なぜ漢文訓読語である「イドコ」が宗綱本や実隆本に現れたのだろうか。池田氏によると、「イヅコ」は「いどっこ」のように発音されていたという。⁽¹⁾「づ」と「ど」の発音の近さから、仮名に混用が生じたのではないかと述べている。⁽²⁾発音の類似性による「づ」と「ど」の仮名の混用により、「いどこ」という表記体系が生じた可能性が考えられる。

安田麻里子氏は、仮名文字で書かれた『土佐日記』における漢文訓読語の効果について、「和文に比べて畏まった印象を与える」と述べる。稿者は書き手の「ここやイドコ」が、『土佐日記』中初めて具体的な地名「土佐の泊」を引き出した問いであることに触れた。そして、都人の書き手が畏まって喋る様子に「莊重味」を加え、より印象的に描くために、あえて漢文訓読語「イドコ」を用いたと指摘する。

だが萩谷朴氏は、より表記に近いイドコの方が古く、「俗語として流布する可能性が多」と述べ、貫之の時代にはイヅコではなくイドコが俗語であった可能性を論じている。⁽³⁾

上原和実氏は、平安末期に成立した和漢混交文『今昔物語集』における「何コ」の読みについて考察している。その中で、新日本古典文学大

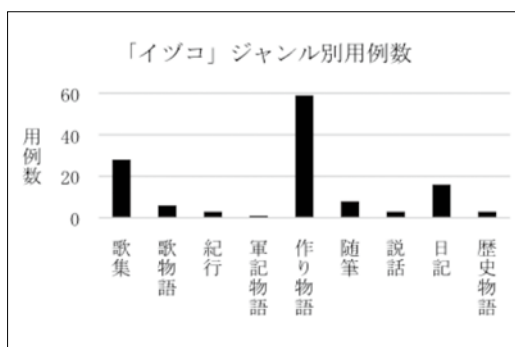


表8:「イヅコ」用例数 平安～室町時代

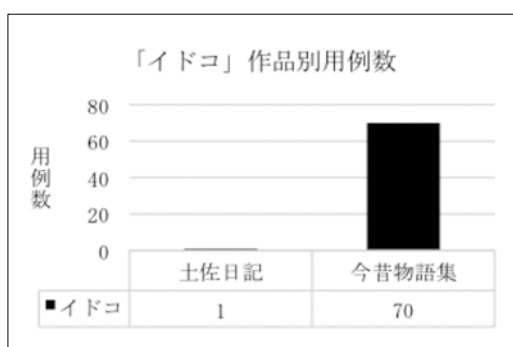


表6:「イドコ」用例数

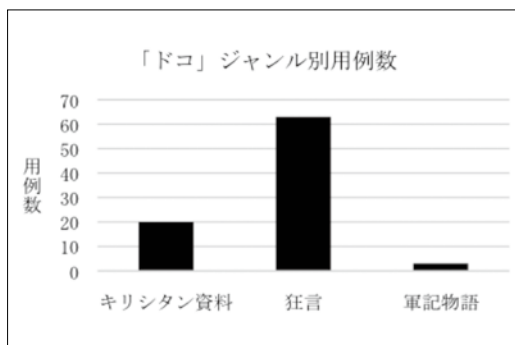


表9:「ドコ」用例数 平安～室町時代

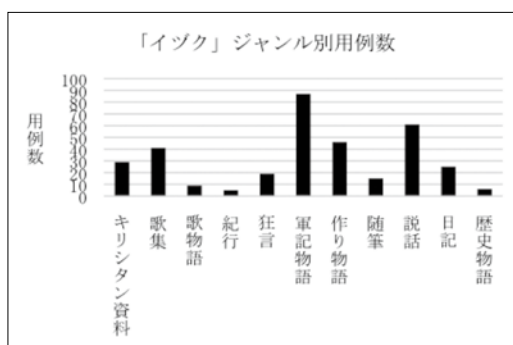


表7:「イヅク」用例数 平安～室町時代

系や新日本古典文学全集などの注釈書が、漢文系の文体である巻二〇以前の「何コ」を「イドコ」、和文調の強い巻二二以降の「何コ」を「イヅコ」と読んでいることを指摘した。

このことから、紀貫之が意識的に仮名で書いた『土佐日記』において、漢文訓読語である「イドコ」は存在しないのではないかと考えた。

3. 「いゝや」との共起

最後に、場所を表す指示代名詞の使いわけの特徴を共起条件から考察する。指示代名詞「ここ」+係助詞「や」に続く指示代名詞を挙げ(表10)、時代別に整理した(表11)。「ここや」+「何処」の用例が担当箇所以外でみられなかったため、「ここ」と共起する指示代名詞に関しても、助詞の種類を指定しない場合の用例数をまとめている。

表10・11から、「ここや」に続く指示代名詞は室町時代以降に用例のある「彼処」が慣用であり、「ここや何処」という表現は稀少例と考えられる。場所を表す指示代名詞以外で「ここや」に共起した語形は、名詞「とだえ」と助動詞「らむ」の二例のみだった。

表12より、助詞を指定しない場合も、特に室町時代までの用例で、指示代名詞「ここ」には、「何処」(イヅク・イヅコ・イドコ・ドコ)より「彼処」(カシコ)が連なる傾向があるといえる。ただ「彼処」が連なる場合、「あちらこちら」という意味をもつ「ここやかしこ」や、「どこもかも」という意の「ここもかしこも」のように、ほとんどの例が指示代名詞の繰り返しによって副詞の程度を強める表現であつた。^(6,7)

これらのデータより、「ここや」と指示代名詞「カシコ」は結びつきの強い二語といえる。

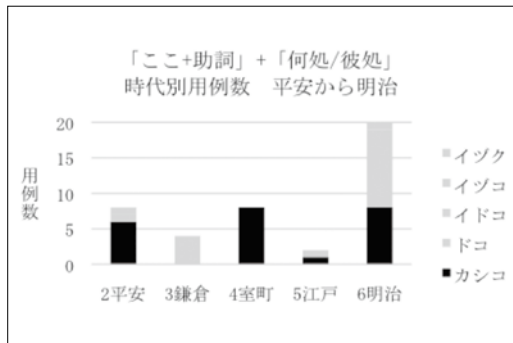


表12: 「ここ+助詞」+場所を表す指示代名詞 用例

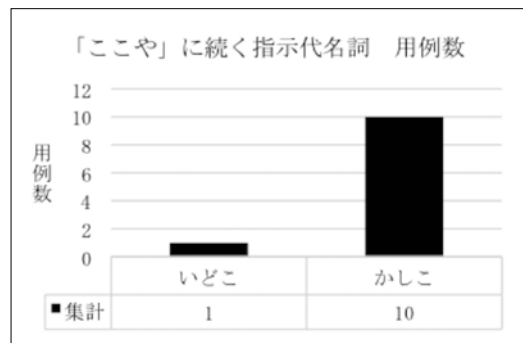


表10: 「何処」「彼処」の前方共起「ここや」用例数

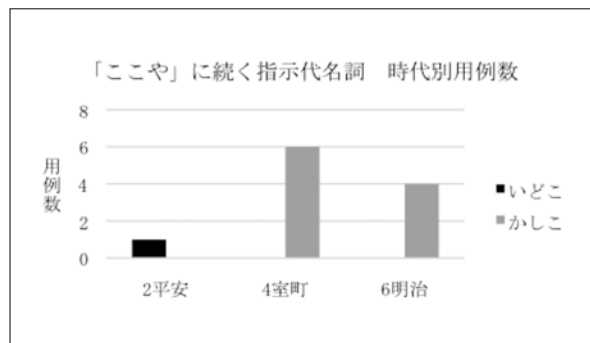


表11: 「何処」「彼処」の前方共起「ここや」時代別用例数

◇ まとめ

ここまで「ここや」に続く指示代名詞に関して、時代・文体・共起面から考察してきた。これまでの調査結果をもとに、いずれの仮名表記が妥当であるかを再検討する。

1. 仮名形出現形の推移より、『土佐日記』成立年代を考えると、原文は「ここやイヅク」もしくは「ここやイヅコ」が適当だ。2. 資料形態の特徴からも、和文資料である『土佐日記』に、漢文訓読語「イドコ」はそぐわないと思われる。また3. 「ここや」との共起より、共起する「ここや」に着目すれば、「カシコ」という語形が挙がってくる。

よって時代や文体、共起面からは、定家本や青谿書屋本の「イヅコ」について、イヅク・イヅコ・イドコ・ドコ・カシコのいずれが適当かを断言することはできなかった。しかしながら平安時代に成立した和文体に、漢文訓読語「イドコ」は適さないのではないだろうか。

定家が原本を忠実に再現しようとしたことが窺える。

注

- (1・2) 池田亀鑑「古典の批判的処置に関する研究 第一部」(岩波書店、一九四一年、pp.276-277)
- (3・4) 安田麻里子「土佐日記の楫取像―漢文訓読語に注目して―」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第一二号、広島女学院大学大学院、二〇〇九年、pp.196-175)
- (5) 萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店、一九六七年、pp.289)
- (6) ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』[「ここやかしこ」]
- (7) ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』[「ここもかしこも」]

参照

- 青木毅「『今昔物語集』における副詞「イマダ」の性格について」(『国文学攷』第一八二号、広島大学国語国文学会、二〇〇四年、pp.11-25)
- 池田亀鑑「古典の批判的処置に関する研究 第三部」(岩波書店、一九四一年、pp.35)
- 上原和実「『今昔物語集』におけるイヅク・イヅコ・イドコ」(『学習院大学国語国文学会誌』第五二号、学習院大学文学部国語国文学会、二〇〇九年、pp.29-43)
- ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』
- 日本語学演習5 第1回授業レジュメ
- 萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店、一九六七年、pp.289)
- 安田麻里子「土佐日記の楫取像―漢文訓読語に注目して―」(『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第一二号、広島女学院大学大学院、二〇〇九年、pp.196-175)